

〔書評と紹介〕

三浦忠司著

『八戸藩の歴史をたずねて』

牛米 努

本書は、平成二十一年と同二十四年の各一年間、「デーリー東北」紙上に連載された原稿をまとめたものである。江戸時代の八戸の歴史を、その舞台となった場所に立って解説した歴史ガイドで、著者による現在の写真が掲載されている。全体は二部構成で、八戸の各所を辿った第一部「八戸藩領をあるく」と、八戸藩ゆかりの東京都内の各所を訪ねる第二部「東京散歩」からなっている。

「八戸藩領をあるく」の構成は、次の通りである。

第1章 八戸藩の誕生

第1節盛岡藩の野心／第2節独立藩の誕生／第3節城下町の成立／第4節領地確定と家臣団／第5節初代藩主直房の死／第6節総領地と村落支配／第7節江戸城への出仕

第2章 藩政の確立

第1節藩政の確立／第2節年貢と税／第3節地方知行の再編／第4節軍制の確立／第5節商業の隆盛

第3章 飢饉と安藤昌益

第1節猪飢渴と宝暦飢饉／第2節飢饉と安藤昌益／第3節昌益の直耕思想／第4節天明大飢饉／第5節財政窮乏と百姓騒動

第4章 藩政改革

第1節藩札の発行／第2節藩政改革の開始／第3節水田開発と検地／第4節領内最大の一揆／第5節天保の七年飢饉／第6節学芸の興隆

第5章 維新の動乱と近代の予兆

第1節九代藩主信順の時代／第2節海防強化／第3節維新の動乱／第4節幕末と近代の予兆

第6章 交通の発達

第1節街道と伝馬継所／第2節藩の飛脚制度／第3節藩主の参勤交代／第4節八戸廻船の成立／第5節旅人の見た八戸

第7章 産業の振興

第1節牛馬の産地／第2節江戸と八戸大豆／第3節鉄産業の振興／第4節鰯漁と製塩

第8章 城下と商業の発展

第1節城下の拡大と町名／第2節商業活動の確立／第3節商家経営と家訓／第4節城下の祭礼と飢饉／第5節社寺の統制と役割／第6節安政地震と大火

第9章 町や村の生活

第1節武家の結婚・離婚／第2節武家の生活／第3節知行藩士の農業経営／第4節百姓との交流／第5節農民のくらし

第10章 村人と婦女子

第1節読書をする村人／第2節藩主夫人とその子／第3節武家へ駆け込む女／第4節藩領を旅する人

「東京散歩」は、八戸藩の藩邸があった六本木や南麻布、蔵屋敷が置かれた深川や取引商人が店を構えた日本橋、安藤昌益ゆかりの千住など、盛岡藩関係も含めた範囲を自由自在に巡っている。

本書の特徴は、八戸の歴史の舞台となった場所だけでなく、八戸藩邸跡をはじめとする東京に所在する八戸藩ゆかりの場所が一書に纏められていることである。日刊紙に連載されたもので、幅広い一般の読者を想定した平易な内容になっており、私のような門外漢でも、楽しみながら八戸藩の通史がわかるようになっていいる。

特に興味を引いたのは、八戸藩の歴史を江戸との関係を視野に入れて叙述している点である。寛文四年（一六六四）に誕生した八戸藩二万石は、寒冷地で米が穫れなかったため石高の割には領地が広域であった。田畑の生産力は低く、藩財政も安定しなかった。藩士も俸禄をカットされたため、参勤費用や生活資金を融通する舫金制度が創設されている。

また、度重なる飢饉のなか、特産物の大豆生産や干鰯・鰯粕、鉄の移出などにより藩財政の確保・安定が図られ、八戸藩は十七世紀末ころから江戸と密接な関係を有することになった。また、参勤交代や八戸城下と江戸藩邸を結ぶ江戸飛脚など、八戸と江戸との距離は思ったより近かったといえる。

八戸藩は創立以来度重なる飢饉に襲われているが、その原因は冷害や洪水などの自然災害だけでなく、八戸藩の生産構造にあるとされる。江戸近郊での醤油生産の隆盛を背景に、藩による大豆生産の強制がなされ、農民たちは「大豆に疲れた」と悲鳴を上げ、猪の大量発生による猪飢饉という特異な飢饉にも襲われている。八戸に在住していた安藤昌益の社

会体制批判は、このような飢饉体験から生まれたとされている。それだけでなく、昌益の思想は医師や僧侶・神官、藩士や商人などからなる八戸の知的集団との相互交流のなかで育まれたものだったというのが著者の指摘するところである。八戸藩の再生産構造が江戸と密接な関係を有していたことから、文化的恩恵を受けない北の小藩ではなく、むしろ八戸湊を通した江戸との交流により豊かな文化的土壌が形成されていたのである。

こうした点は、十七世紀末ころから盛んになる大豆や干鰯、鰯粕などの江戸移出により発展する、八戸の港湾都市としてのもうひとつの姿である。大豆や干鰯・鰯粕などの特産物は、江戸深川の八戸藩蔵屋敷などで入札や競により取り引きされたのである。江戸とのつながりは、「東京散歩」で取り上げられる人物やゆかりの場所を辿ることにより、一層明確になるであろう。

東京在住の筆者には、第一部の「八戸藩領をあるく」よりは、第二部の「東京散歩」のほうが土地勘のある分、楽しみながら読むことができた。もともと、それだけでなく、江戸と八戸との繋がりを考えることで、より興味深く八戸藩の歴史を学べたような気がしている。逆に八戸の地元の人々には、八戸藩の世界が江戸に広がっていくことで、新たな魅力を感じることができないのではないだろうか。

「八戸藩領をあるく」は、平易な記述ながら、これまでの著者の研究をベースとしたものであり、巻末には最低限の史料や参考文献が掲載されている。一般の歴史ファンのみならず、八戸藩の歴史を学ぼうとする方には、格好の、それも最新情報満載の歴史ガイドである。

(A5判、三〇二頁、デーリー東北新聞社、平成二十五年十一月刊、

価格一七四円十税)

(うしごめ・つとむ 税務大学校(租税史料室)研究調査員)